

## アフガン・ディアスポラ知識人とイスラーム ——ハーシム・カマーリーの軌跡と思想——

桐原 翠\*

Afghan Diaspora Intellectual and Islam:  
The Locus of Mohammad Hashim Kamali's Life and his Ideology

KIRIHARA Midori

This paper discuss how the Afghanistan Diaspora uses common religious and cultural trends in the realm of the Islamic World, and how they adopt strategies to consolidate their humanosphere. Islam is among the most important bonds for the Afghanistan Diaspora and, when they live in a Muslim country, it is also a common bond between the diaspora community and their Muslim host society. Strategies to consolidate the humanosphere provide a necessary foundation for human existence, for example, the natural environment (e.g. soil, air, and water), economy, networks of people, family, education, and the community. I am deeply interested in surveying the function of Islam in connecting the Muslim diaspora community with their host Muslim country. In this context, I am also interested in studying the thought of an Islamic intellectual, originally from Afghanistan, who has been very active in Malaysia. He is Mohammad Hashim Kamali. He is an intellectual leader of international influence. I also briefly want to mention Islamic Cosmopolitanism, where 'Cosmopolitanism' refers to a citizen of the world. In addition, to further understand some of Hashim Kamali's literary work, ideas, thoughts, and wide-ranging vision in this rapidly changing global world, I introduce the term 'Islamic Cosmopolitanism.'

### 1. はじめに

本論考では、紛争の絶えないイスラーム世界において、自国外での生存を余儀なくされた人々が、イスラーム圏内の宗教的・文化的共通性をいかに生存戦略に活用しているか、その一面を明らかにしたい。特に、40年にも及ぶ戦乱によって他国へと離散したアフガニスタン人に着目し、イスラーム世界における平和的かつ持続的な生存基盤構築という視点から、難民・移民・ディアスポラにおける越境の意味についても考察したい。なかでも、アフガン・ディアスポラ知識人であるハーシム・カマーリー(Mohammad Hashim Kamali, 1944-)を事例として取り上げ、彼の生存戦略から彼のグローバルな思想を明らかにすることを目的とする。

アフガニスタン・イスラーム共和国 (Islamic Republic of Afghanistan, [パ] Da Afghānistān Islāmī Jumhoryat, [ベ] Jomhūriyeh Eslāmīyeh Afghānistān)<sup>1)</sup>は、国民の99%をムスリムが占めるイスラーム色の強い国家であり、近隣諸国と深く関わりを持ち存続してきた。多民族国家としての側面も強い。そのため、アフガニスタン人の自己認識は民族や部族に還元して考えられる傾向がある。そのため、パキスタンやイランに暮らすアフガニスタン人を対象とした研究や、国内における民族間の紛争や和

\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

1) ローマ字転写について：英語以外の言語に転写した場合には、その言語名を〔 〕によって記す。〔パ〕：パシトゥー語、〔ダ〕：ダリー語、〔ベ〕：ベルシャ語。例：アフガニスタン・イスラーム共和国 (Islamic Republic of Afghanistan, [パ] Da Afghānistān Islāmī Jumhoryat, [ベ] Jomhūriyeh Eslāmīyeh Afghānistān)

合を重視した研究が多く存在する。

他国に離散したアフガニスタン人は、まずいったん離散した後に自国へ帰還する者と、ディアスポラ化し他国に定住する者の2種に分けられる。前者の代表的な例として、現アフガニスタン大統領のアシュラフ・ガニー（〔パ〕Ashraf Ghani, 1949-）や、女性活動家であるマラライ・ジョヤ（〔パ〕Malālai Joyā, 1978-）があげられる。帰還した人々の多くは国家再建のために活動し貢献している。一方、後者のディアスポラ化し他国での定住を試みるアフガニスタン人も数多く存在している〔Marchand et al. 2014〕。彼らの中には、イスラーム世界に影響を与える知識人も含まれている。

本稿では、後者の事例として、ハーシム・カマーリーに焦点を当てる。

## 2. アフガニスタン・イスラーム共和国の成立過程

### 2-1. 多民族国家アフガニスタン

アフガニスタン・イスラーム共和国の国際的な地域区分は両義的である。南アジア地域機構に加盟している点から見ると南アジアに属するが、歴史的には西アジアに含まれる。アフガニスタンはイスラームを国教としており、スンナ派が85%、シーア派が14%である。法学派はハナフィー学派である。首都はカーブル<sup>2)</sup>で、人口は約3,000万人〔UNSD 2016: 3〕である。地理的にはイラン、トルクメニスタン、ウズベキスタン、タジキスタン、中国、パキスタンの6ヶ国に囲まれ、国内を北東から南西にヒンドークシュ山脈が延びているという特徴を持つ。この山脈の雪解け水を利用し、人々は農業を生業としている。近年ではアヘン栽培も盛んに行われている〔Gibbons 2016〕。

国内の人口はパシュトゥーン、タジク、ハザラ、ウズベク、アイマク、トゥルクメン、パローチとその他の少数民族から構成されている。民族ごとの結束が強いという点が特徴としてあげられる。2004年のアフガニスタン憲法改正時には、憲法第4条に「アフガニスタン人」が明確に定義されている<sup>3)</sup>。また、公用語はダリー語とパシュトゥー語であるが、州によっては言語が異なることがある。言語については憲法の第16条に明記されている<sup>4)</sup>。

#### (1) アフガニスタンの成立

現在のアフガニスタンが成立したのは1919年の第3次イギリス・アフガニスタン戦争（アフガン戦争）が終結を迎えた時である。それ以前にはイギリスにより事実上の保護国化がなされていたが、この戦争の結果、1919年にラウルピンディにおいてイギリスと条約を締結し、完全な独立を果たすことになった。この独立が近代国家としてのアフガニスタンの出発点となった。

この独立を実現させた当時のアフガニスタン国王はハビイーブッラー・ハーン（〔パ〕Ḥabībullah Khān, 1872–1919、在位 1901–1919）である。彼はアブドゥル・ラフマーン（〔パ〕‘Abd al-Rahmān Khān）の政策を継承して、王国の統一と中央集権化を目指した。1901年から政権を握った彼の政策の中で着目したいのは、国外アフガニスタン知識人への対応である。彼には、カーブルを知的活動の中心地に変えるという構想があった。そのため、彼の近代化政策には教育の政策を進めることと、外国で異文化に触れた知識人の帰国を促すことが重要であった。この時、約20年ぶりに帰国した

2) Kabul のことである。「カブール」と表記されることもあるが、『岩波イスラーム辞典』に則り、本稿では「カーブル」と表記する〔久保 2002: 283〕。

3) 「…アフガニスタンの国民の全てにアフガニスタン人（アフガーン）という語が適応される。」〔鈴木 2005〕。

4) 「パシュトゥー語、ダリー語、ウズベク語、トルコマン語、バルーチ語、パシヤイ語、ヌーリストターニー語、バミール語、そして国内で使用されているその他の言語の中で、パシュトゥー語とダリー語を国家の公用語とする。…出版物の発行とマスメディアにおいて、国内で使用されている全ての言語を用いることは自由である。」〔鈴木 2005〕

のはマフムード・タルジー（〔ダ〕Mahmūd Tarzī, 1865–1933）であった。タルジーは国外追放された父に従って、ディアスポラとしての約20年の間に、インド、イラク、トルコ、シリアを家族と共に訪れた。その後単独でイスタンブールを訪れ、イスラーム改革者のジャマルッディーン・アフガーニー（〔ア〕Jamāl al-Dīn al-Afghānī, 1838/1839–1897）とも邂逅した。

タルジーが20年ぶりに帰国した後、立憲主義者集団の指導者となった。これを「若きアフガン」と呼び、この集団は反イギリス、親トルコを掲げていた。さらに、知識人の結集を目指し『セラージ・ウル・アクパール』（後の『セラージ・ウル・アクバーレ・アフガーニヤ』である。）を発刊している。「若きアフガン」の理念は次の国王アマースッラー（在位1919–1929）にも引き継がれたが、その改革は急激すぎたため、ウラマーの反発までも起きた。さらにタジク人のバッチャイエ・サカーオ（〔ベ〕Bachcha-ye Sakāo）の反乱が起きて、「若きアフガン」の理念は頓挫することになった。

この反乱を契機に、ナーディル・ハーン（〔ベ〕Nādir Khān, 在位1929–1933）が即位した。彼はアフガニスタン国家の自立には安全、繁栄、科学の三要素が重要であると考えた。この三要素の発展のために、シャリーアの精神を基礎に置かなければならないとし、アフガニスタン国内でのイスラーム化への積極的な動きが見られるようになった。その一環として、アフガニスタンで初めてクルアーンが印刷され、ブルカの着用義務が復活し、ハナフィー学派にしたがってシャリーアを遵守することとなった。カーブル大学も、彼の代に設立された。

対外的には、中立外交を行っていた。加えて、アフガニスタン国発展のために英国の支援だけではなく、日本とアメリカの支援が必要であると考え、1930年11月にロンドンにてアフガニスタン・日本修好条約が締結された。

このようにして、アフガニスタンは次第に近代化の道を歩み、独立国家としての基盤を築いた。このような時代には、国民の大規模なディアスポラ化は起こらなかった。しかし、20世紀後半には、次第に動乱期に入ることになった。

## (2) 共和政成立以降＝四月革命(1978)とソ連侵攻(1979)

第二次世界大戦後の1949年、アフガニスタン国内では民主化の声が高まり、言論・報道の自由に対する規制緩和がなされた。そのため、国民の政治批判や王家への非難の声がより顕著になった。この頃から王朝と国民の間に乖離が生じ、民主化への移行期となった。1963年には憲法改正が行われた。改正の目的は、民主主義の導入と経済の改善、活性化であった。

しかし、実のところこの時の首相選出はザーヒル・シャー（〔パ〕Zāhir Shāh, 1914–2007、在位1933–1973）によるものであり、改正前の憲法には王族の政治関与が禁止されていたため、早急に憲法を改正したという思惑があった。1964年に新憲法が公布され統治権は国民であり、王は人的象徴とした国民の意思を体現した憲法が公布されたのであった。この翌年の1月に、左翼政党であるアフガニスタン人民民主党が結成された。10月にはカーブルの大学生を中心とした大規模なデモが行われ、青年層の分裂が浮き彫りになった。若者は主に3つの集団に分かれた。すなわち、イスラーム回帰を唱える集団、社会主義を唱える集団、パシュトゥーン民族主義を唱える集団である。都市と地方、エリートと農民の格差が若者の分裂を引き起こした一つの要因であった。この格差に追い打ちをかけるように1972年には飢饉が起こっている。

ザーヒル・シャーが私用のためアフガニスタンを離れた1973年、ムハンマド・ダーウド・ハーン（〔パ〕Muhammad Dāoud Khān, 1909–1978）が権力を掌握し、共和国を宣言した。ダーウドは1953年に首相を務めており、ザーヒル・シャーの従兄にあたるが、王政を廃止し権力の座に就いた。

ダーウドの政治は独裁体制であり、国内のイスラーム指導者たちを抑圧した。当時のアフガニスタンの主要なイスラーム指導者であったグルブッディーン・ヘクマティヤール（〔パ〕*Gulbuddīn Hekmatyār*）、ブルハヌッディーン・ラッバーニー（〔ダ〕*Burhānuddīn Rabbānī*）は、パキスタンへ逃れた。

1977年に共和国憲法が採択され、そこでスンナ派とシーア派の差別廃止や18歳以上の全ての人々に投票権が与えられた。これらは民主化を目指す一貫として考えられていた。1978年には人民民主党党首のヌール・ムハンマド・タラキー（〔パ〕*Nūr Muhammad Tarakī*, 1917–1979）による大規模なデモが行われた。憲法改正時にロヤ・ジルガ<sup>5)</sup>から人民民主党が排除されたことが、このデモの背景となっている。ダーウドは同党の幹部を逮捕したが、逆に人民民主党の呼びかけにより軍が蜂起し、「サウル革命」が起きた。ダーウドは暗殺され、国内の権力は人民民主党へ移り、国名もアフガニスタン民主共和国となった。初代大統領兼首相を党首であるタラキーが務めることとなった。タラキーは外交政策にも力を入れ、1978年12月ソ連と「友好親善20年条約」を締結した。

1979年2月に隣国のイランではイラン・イスラーム革命が起きた。その影響を受けてか、アフガニスタンでは3月にイスラーム指導者たちによって、反政府のジハードが宣言されている。そして、12月27日ソ連軍のアフガニスタン侵攻が開始された。これを契機にアフガニスタンは戦場と化していったのである。

## 2-2. ソ連侵攻とターリバーン政権期

### (1) ターリバーン政権期とアフガン・ディアスポラ政権期

これ以降はムジャーヒディーン（*Mujāhidīn*）の誕生と内戦、ターリバーン<sup>6)</sup>（*Tālibān*）とムジャーヒディーンによるレジスタンスが行われる時代へと突入する。長い戦乱によって、多くのアフガニスタン人が難民となり、さらにディアスポラ化することになった。

1988年にはジュネーブ協定により、ソ連の撤退が決まり、翌年1989年にソ連軍はアフガニスタンから撤退したが、ソ連の傀儡政権であるナジীবッラー（〔ベ〕*Najībullah Khān*）政権だけは残った。その一方で、反政府勢力であったムジャーヒディーンはパキスタンにおいて暫定政権を樹立し、アフガニスタンは二政府状態となった。1992年にはムジャーヒディーンがカーブルを制圧した。

しかし、彼らも党争から内戦を招き、それが1994年のターリバーン結成につながった。ターリバーンが1996年9月にカーブルを制圧すると、ムジャーヒディーン組織は反ターリバーンで結束し、北部同盟を結成した。両者の戦いは国土全域を巻き込み、国内は壊滅的な状況へと陥った。

無政府状態となったアフガニスタンに目を付けたのはウサーマ・ビン・ラーディン（〔ア〕*Usāma bin Muḥammad bin Lādin*, 1957–2011）である。彼は、義勇兵や金銭の支援を行うことでターリバーンに近づいた。1990年末にはビン・ラーディン引き渡しの件でアメリカとターリバーンの対立が見られるようになり、2001年の9.11後にはアフガニスタンに対するアメリカの攻撃は激化した。これを契機に国内では北部同盟が反撃を行いターリバーン政権は崩壊し、暫定政権が樹立された〔前田・山根 2002〕。

2004年にカルザイ政権が樹立し、新憲法が發布された。ハーミド・カルザイ（〔パ〕*Hāmid Karzai*）は1992年にムジャーヒディーン政権の外務次官を務めた人物である。一時期はターリバーンを支持していたものの、父親を殺されたことにより反ターリバーン派になった。そして、2004年の10

5) *Loya Jirga* 近現代アフガニスタンにおける最高決定機関〔小牧 2002b: 1072〕。

6) 「タリバン」と表記されることもあるが、岩波イスラーム辞典に則り、本稿では「ターリバーン」と表記する〔遠藤 2002: 617〕。

月に行われた大統領選挙で勝利し、12月に正式に政権を発足させた[鈴木 2005]。

彼の特徴において重要なのは服装である。彼は公の場に姿を現す際に、帽子を被り、ブレザーを着用し緑色の縦縞のコートを羽織るというスタイルをとっている。この帽子はパコールと呼ばれ主に中央アジア出身者であるタジク人などが被るものである。そして、コートはチャパンと言いうズベク人、トルクメン人が着用するものである。このようなスタイルには、多民族国家であるアフガニスタンの民族対立を懸念し、融和をめざす立場が示されている。また、ターバンを巻くことはターリバーン政権を彷彿とさせるため、帽子を選んだと考えられる[渡辺 2003]。そして、洋物のブレザーは長らく海外で学んでいたことを示している。

カルザイ時代が終わると、2014年にアシュラフ・ガニーが大統領となり、ガニー政権が開始した。ガニーはコロンビア大学で博士号を修得した後に、ソ連軍が侵攻したためアメリカへ移住したという経歴を持っている。ガニーにはカルザイのようなファッションのパフォーマンスはないが、両者にはディアスポラという共通点がある。ターリバーン政権崩壊後の政権はどちらも、いわばディアスポラ政権であった。

海外で教育を受けたため、新たな視点でアフガニスタンをつまづいてくれるのではという期待は大きいものの、国内で生活している国民やアフガニスタン人の気質からして、ディアスポラ化して海外で教育を受けた人びとについては「逃げた人」というイメージもつきまとうようである。海外で教育を受け、アフガニスタンに帰国し政策を展開するという構図は、アフガニスタンを近代化へと導いたマフムード・タルジーを想起させる。

### 2-3. ホスト国マレーシアにおけるアフガン・ディアスポラ人

#### (1) アフガン・ディアスポラ人について

ディアスポラの説明で最もよく用いられるのは、ウィリアム・サフラン[Safran 1991]や、ロビン・コーエン[Choen 2008; コーエン 2012]などである。コーエンのディアスポラ概念にはふるさと(homeland)が強調されている。ディアスポラに関する先行研究から、本研究におけるディアスポラの位置づけに重要な要素を3点にまとめることができる——①自らの意志とは無関係に母国を離れたこと[羅 2014: 67]、②ふるさとへの帰属意識や帰還を念頭に置いていること[コーエン 2012]、③世界各地に離散している「同胞」との連携がみられること[戴 2014: 140]である。この3点に反する内容として、コリアン・ディアスポラの例をあげると、よりよい生活を求め、自らの意志で離散する人々はトランスナショナルであり、加えてコリアン・ディアスポラにおいては、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ヨーロッパに移動した人々もトランスナショナルであると考えられている[羅 2014: 68]。

移民や難民からは、国家や国境の存在を強く感じることが出来る。国家や国境の存在があるからこそ、移民や難民の枠組みが強調されやすく国内での人権、シティズンシップの問題に焦点が当たりやすくなる。しかし、ディアスポラをみると移動した人々の存在が強く感じられる。そこには特に、宗教的・文化的共通性での繋がりの重要性が存在している。世界各地に生存基盤を構築するアフガン・ディアスポラ人の場合、イスラームの存在が彼らのふるさとへの帰属意識や同胞との連携を保っている。つまり、国家という枠組みの概念を持たないイスラームが、アフガン・ディアスポラ人のネットワーク形成に大きな影響を及ぼしている。

アフガン・ディアスポラ人とは、紛争や戦乱のために祖国であるアフガニスタンに居住することが困難となり、離散した人々のことを指す。さらに、離散先でアフガニスタンコミュニティを形成

している、もしくは、祖国のために貢献している人々のことを指す。

アフガニスタン人の特徴としてパキスタン、イランそして、ヨーロッパ諸国にアフガニスタン人が多くみることができることである。また、ヨーロッパ諸国、ロシア、インドに大規模なディアスポラコミュニティが存在している [Marchand et al. 2014]。また、[Baraulina et al. 2007] によると、ドイツにも多くのアフガニスタン移住者の存在がわかる。また、[Johnson et al. 2012] やオーストラリア政府が出版している資料によると、オーストラリアにもアフガニスタンコミュニティが確立していることがわかる。

## (2) ホスト国マレーシアの成立とイスラーム

本研究の中心であるカマリーが拠点としているマレーシアについて、簡単に述べたい。マレーシアは東南アジアに位置し、マレー半島南部の 11 州とボルネオ島北部の 2 州から成っている。タイ、インドネシア、ブルネイとは陸上の国境を接しており、シンガポール、フィリピンとは海を隔てて近接している。国家体制は連邦制の立憲君主国家であり、元首は国王であるが、政治の実権は首相が握っている。人口は約 3,000 万人<sup>7)</sup>で、アフガニスタンと同じように多民族国家である。民族構成はマレー系が 67%、華人系が 24%、インド系が 7%、その他が 0.7% となり、人口の約 6 割がムスリムである。その他に、仏教、儒教、ヒンドゥー教、キリスト教が存在している。言語はマレー語 (Bahasa Malaysia) を公用語としており、1967 年までは英語が公用語とされていた。また、華人系やインド系は出身地の母語を使用することが一般的である。民族と宗教の構成を見ると、多様性が混在していることがわかる。

## (3) マレーシアの国民統合政策

上記のように、民族的・宗教的な混在がなされているマレーシアであるが、国民統合政策が実施されている。政策が本格的になったのは 1969 年 5 月 13 日に起きたいわゆる「人種暴動」である。この暴動を俗に 5・13 事件と言い、中華系住民とマレー系住民との間で発生したものである [長谷川 2009: 1150]。この暴動を契機に民族の融和を図るようになった。

華人系とインド系の人々がマレーシア国内に移住して来たのは 1800 年代のことである。まず、1833 年にインド人の契約労働者の移住が始まっており、1890 年にはインド人移民のための制度まで確立している。また、1848 年にはペラ州のラルト地区の錫鉱山開発が始まり多数の中国人労働者が国内に入ってきたという歴史がある。

国民統合政策は、まずシンガポールと英領北ボルネオを併合し連邦国家マレーシアが誕生した 1963 年の *The Malay Mail* 紙に「単一マレー文化」[築島 1965] という言葉が挙げられていることから始まる。この時、具体的にどのように単一にしていくかといった内容は書かれていないものの、「人種暴動」以前から既に、国民の統一に注目が集まっていたことは確かである。

次に 1991 年にはマハティール首相 (Mahathir bin Mohamad, 1925-) はワワサン 2020 を掲げている [池端 1999]。これは 2020 年までに先進国入りを果たすことを目標に掲げられたものである。これを達成する構成要素の一つに「運命を共有しているという感覚をもつ、統一されたマレーシア国民」 [中村 2006] という言葉があり、ここからも民族統一への問題意識を窺うことができる。そして、現在のナジブ (Mohammad Najib bin Tun Haji Abdul Razak, 1953-) 政権では「ワン・マレーシア」を推進している。これは、民族統一と似ているが、共存する他の民族一つ一つを尊重し一つになるとい

7) マレーシア統計局 HP 参考 <<https://www.statistics.gov.my/index.php>>

う考え方である。そのため、現在国内の至る所に「ワン・マレーシア」の看板やオブジェを見ることができる。

### 3. アフガン・ディアスポラ知識人

#### 3-1. ムハンマド・ハーシム・カマーリーとは

##### (1) 「ふるさと」に貢献するアフガン・ディアスポラ人

ディアスポラとなり国外へ流出したアフガニスタン人は、やがて帰還する人々と、ホスト国に残る人々に分かれている。アフガン・ディアスポラ人として帰還している主な人物としては、2014年に大統領となったアシュラフ・ガニー、女性活動家として活躍しているマラライ・ジョヤを挙げることができる。

アシュラフ・ガニーは、コロンビア大学で博士号を修得した後にソ連軍が侵攻したため、アメリカへ移住している。その後は世界銀行に勤め、暫定行政機構が発足するのに伴いアフガニスタンに帰国し、現在は大統領になっている。彼は帰国し、コーエンの言う「ふるさと」に貢献している例と言えるであろう[Cohen 2008]。

女性活動家のマラライ・ジョヤは、4歳の時から約16年間、イランとパキスタンで難民生活を強いられた。彼女の場合は、移住先は隣国とはいえ、二つのなじみのないホスト国に渡った例である。彼女は帰還後、祖国の国会議員となった。現在は女性活動家としてアフガニスタンにおける女性の権利擁護を訴えている。

##### (2) ハーシム・カマーリーとは

次に、他のホスト国に移住しディアスポラとして暮らしている代表として、ムハンマド・ハーシム・カマーリーを見てみよう。

彼は、現在マレーシアで活躍するアフガン・ディアスポラ知識人の1人である。彼は1944年にアフガニスタン東部のナンガルハール州(Nangarhar, [バ]Nangarhār)で生まれた。ナンガルハール州はパシュトゥーン民族が多い地域である。パキスタンとの国境にはカイバル峠があって交通の要衝となっており、難民が隣国のパキスタンに逃れる場合には、通常はこの地域を經由する。

カマーリーはカーブル大学で法・政治学部を卒業し、弁護士として法務省に勤めたり、フアリヤブ州で検事長の業務に従事していた。その後イギリスに渡り、ロンドン大学で1972年に法学修士、1976年に法学博士号を取得している。博士論文 *Matrimonial Problem of Islamic Law in Contemporary Afghanistan* をもとに、1985年には *Law in Afghanistan: A Study of the Constitutions, Matrimonial Law and the Judiciary* を出版している。

ちょうどロンドン大学で法学博士を取得した頃(1976年)、アフガニスタン国内ではグルブッディーン・ヘクマティヤールが「イスラーム党<sup>8)</sup>」を結成し、イスラーム復興の一環として反政府運動が展開されていた[前田・山根 2002: 142]。その3年後の1979年には、反政府運動の高まりに危機感を抱いたソ連が派兵し、ソ連軍のアフガニスタン侵攻が起こる。このため帰国が困難となったカマーリーは、次第にディアスポラ知識人の道を歩むことになった。

1975年から言語モニターとして英国放送協会(以下、BBC)で働いていたカマーリーは、1980年

8) 正式名称をイスラーム党ヘクマティヤール派 (Islamic Party of Afghanistan, [ダ]Hezb-e Islāmī-e Afghānistān (HIH)) という。グルブッディーン・ヘクマティヤールを党首とする急進派組織。パシュトゥーン人が中心で、バグラン州 (Baghlan, [バ]Baġlān) やクンドゥーズ州 (Kunduz, [ダ]Kundūz) などの北東地域やガズニー州、ヘルマンド州に勢力基盤をおく[窪田 2005: 278]。

にカナダのマギル大学に移って教鞭を取るようになった。1985年からはマレーシアに居を移し、2007年までマレーシア国際イスラーム大学で教鞭を取った。ターリバーンがカーブルを占領した1996年頃には、彼はマレーシアに拠点を置いていた。

1985年以降の活動をマレーシアにのみ着目して述べると以下ようになる。1985年から2007年まではマレーシア国際イスラーム大学の教授兼国際イスラーム思想文明研究所所長を務めた後、2007年から現在に至るまでCIMB(マレーシア第2の規模を誇る銀行)のシャリーア委員会委員長、同シャリーア委員会社外執行取締役、そしてマレーシア国際戦略研究所の上級研究員を務めている。2010年以降は、IAIS Malaysiaの創立者兼最高責任者である。

### 3-2. ハーシム・カマーリーの生存戦略

生存戦略には、様々な形がある。たとえば、アフリカに住むアフガニスタン人は貿易商人を務め、イラクでは研究者、オーストラリアでは起業家、カルフォルニアでは大工、ロンドンでは会社員として働くなどの例が見られる[Crews 2015]。さらに、日本では中古車のディーラーやアフガニスタン雑貨店を経営している人々もいる。アフガニスタンの隣国であるパキスタン、イランはもちろんのこと、湾岸地域のドバイそして、欧米諸国には数多くのアフガニスタン・レストランが確認できる。母国を離れたアフガニスタン人らは上記のように、様々な職業に従事し新たな国での生存基盤を構築しようとしている。この他にも、生存戦略の方法はさまざまである。本研究の調査対象国マレーシアで生存基盤を構築しているハーシム・カマーリーの生存戦略に着目したい。ここでは、①マレーシアに設立された研究所とカマーリーの関係、②マレーシアの教育とカマーリーの関係を検討する。

#### (1) 「ワサティヤー」の理念

2012年1月マレーシアのナジブ・ラザク首相は、マレーシア政府主導のもと Wasatiyyah Institute Malaysia (WIM) をプトラジャヤに設立した。さらに、マレーシアイスラーム国際大学に、International Institute of Wasatiyyah (IIW) を設立している。これらの設立背景には、Wasatiyyah を政治の一部に取り込む目的も見られる。例えば、Tahir [2012] によると、ナジブ首相は人類と世界の政治的緊張問題を解決するためのアプローチを推進することがめざされ、Bernam [2014] によると、Wasatiyyah を国政の基本理念とし、マレーシアを近代的で進歩的なイスラーム国家とする目的が掲げられている。さらに、ナジブ首相は、マレーシア人の人権を守ることの重要性を語っており、人権は、シャリーアの文脈において定義する必要性を指摘している。また、若者がターゲットとされる現代世界における流れを危惧しており、若者の過激派組織への参入やトランスジェンダーの問題も若い世代に大いに関係すると考えているようである。このような現状を踏まえた上で彼は Wasatiyyah を政策の一環とし、教育、若者、経済と発展、行政と法、団結と社会、政治とガバナンス、安全性とセキュリティの6つのポリシーを打ち出している [Cheah 2015]。このような、政治的な背景も伴い Wasatiyyah の概念がマレーシア国内で使用され、研究所の設立に至っていると言える。加えて、マレーシアは穏健派という立場を強く表しており、Wasatiyyah を使用する基礎に Global Movement of Moderates (GMM) という動きが存在すると言える。GMM は、マレーシアのナジブ首相が2010年の国連総会中に行ったスピーチの中から提唱されたものである。そのスピーチにおいて過激派と穏健派の対立を主張した [Fallows: 2010]。さらに、GMM のアプローチを基礎に、2012年には Global Movement of Moderates Foundation (GMMF) が組織された。そして、GMMF

の知的基盤として、平和共存、ガバナンスと法の支配、財政と経済、教育、紛争解決、過激派への対抗、イスラモフォビアの理解を促している[GMMF: n.d.]。

マレーシア政府が主体となった、組織やグループにカマーリーもイスラーム法学者として、イスラーム知識人として大きく関わっている。2015年に出版された[Kamali 2015]は、Wasatiyyah そして、イスラームにおける中道の意味を論じており、出版にあたり、大きな記念セレモニーが開催されている[Itar 2015]。このセレモニーにはバダウィ前首相も参加した。ここまでみると、ナジブ大統領が政策として、Wasatiyyah を全面に押し出しており、それに呼応するかのようカマーリーも Wasatiyyah に関連する研究書を多数出版していることがわかる。彼の思想が、マレーシアの政策に合致したと言える。しかし、カマーリーの主張をよく見ると、ディアスポラの立場を反映したコスモポリタニズムの要素が強く、マレーシア色が濃いナジブ首相の政策といくつかの点で大きく異なっている。

## (2) イスラーム知識人と教育

ハーシム・カマーリーは、アフガン・ディアスポラ知識人としてマレーシアやイスラーム世界全体において重きをなしている。「世界で最も影響力のあるムスリム 500 人・2016 年版」[Schleifer and Ahmed 2015: 117]にも選ばれている。さらに、マレーシアイスラーム国際大学(IIUM)が主催する“Isma'il al-Faruqi Award for Academic Excellence”を1995年と1997年の2度にわたり受賞している。加えて、2010年にはKing Abdullah II bin Hussein International Awardを受賞した[Marifa: [2014]]。受賞歴だけでなく、彼の著作はインドネシア語、トルコ語、ペルシャ語、イタリア語、ダリー語、パシュトゥー語、ベンガル語に翻訳されているため、世界中で彼の思想を確認することができる。カマーリー自身は、イスラーム法に関連する書籍等が、世界中で読むことが可能なように英語で記している[Kamali 1991]。マレーシアに拠点を置く、カマーリーであるが、マレーシア国内だけでなく、国外で行われる会議等にも数多く出席している。さらに、母国であるアフガニスタンへの働きかけも行っており、2003年にはアフガニスタン憲法調査委員会の暫定議長を務めている。そして、2014年にはカルザイ政権が誕生してからの10年間経った今、アフガニスタンでは何が問題か解決策は何かについて論じている[Kamali 2014]。このように、賞の受賞や母国への働きかけを行うことが出来るのは、彼の生存基盤が安定しているためではないかと推測される。

彼は、マレーシアにおいて様々な役職についており、中にはマレーシア国内にとって重要だといえるものも含まれている。また、マレーシアを拠点とする複数の研究所との関わりも大きい。カマーリーの思想や活動、試み等とマレーシアの政策とが大きく合致したのではないかといえる。また、マレーシアでは、現在においても教育に力をいれており、それはマハティール政権期から続くものであるといえる。マレーシアイスラーム国際大学はマハティール政権期に設立された大学であり、カマーリーも1985年から2007年まで教鞭をとった大学である。

マレーシア国際イスラーム大学は、1970年代のマハティール政権期に、西洋寄りの思想や教育の高まりに危機感を覚えたイスラーム知識人により設立の提案が成されたこととされている。加えて、この頃から教育におけるイスラーム化が始まったとされている。西洋化の波に危機感を感じていたイスラーム知識人であるサイド・ムハンマド・ナキーブ・アル=アッタス(〔ア〕Sayyid Muḥammad Naqīb al-'Aṭṭās)は、1973年に教育問題を論じるイスラーム会議の開催を促している。その4年後の1977年に、アッタスが開催責任者を務め、第一回世界イスラーム教育会議がマッカで開催された。この会議を開催する目的は、各国が直面する教育の問題を共有し、伝統的なイスラーム教育の

復興を目指すことのようなのである。そして、アッタスは「イスラーム教育の目的」というタイトルで基調講演を行い、会議に参加したイスラーム関係者にイスラーム教育の重要性を説いている。第一回の会議を経て、1980年にはイスラマバードにおいて、第二回世界イスラーム教育会議が開催された[Saqeb 2000: 45-47]。この2回の会議を受け、当時首相であったマハティールは1982年にアラブ首長国連邦にてマレーシアイスラーム国際大学設立についての構想を語ったとされている。大学設立には、マレーシア政府やパキスタン、バングラディシュ、トルコ、エジプト、サウジアラビアの支援があったようである。このような背景から、マレーシア色の強い大学というより、イスラーム色の強い大学となった。また、イスラームに則った教育を重要視しているところからも、イスラーム色の強さを感じる事が出来る。

このような、設立背景を持ったマレーシアイスラーム国際大学は、教育、研究などの様々な活動を通し、世界中から評価されており、約92か国から学生が集まるなど、大きな発展を遂げている。この成長はウンマの地理的文化的多様性の影響を大きく受けている[Saqeb 2000: 57]。これらは、教育におけるウンマの様態であるが、ウンマの現代的様態として、幅広い視点でムスリムを見たときに人々の越境というのはウンマの構造を構造化していく中で重要なものになると考えられる。

### 3-3. カマーリーの思想的特徴から

#### (1) 「イスラーム・コスモポリタニズム」

コスモポリタニズムという用語は、世界市民や世界市民主義などと呼ばれる。そして、民族や国家の枠にとらわれず、人類の共同体として属する市民のことである[河野 2015]。コスモポリタニズムについての先行研究はデヴィッド・ハーヴェイ[ハーヴェイ 2013]がある。そして、エマニュエル・カント[カント 1985]のコスモポリタニズムへの言及は、現代のコスモポリタニズムのアプローチに影響を与えたとされている。

イスラーム世界における、ウンマの現代的な様態を捉える際に、コスモポリタニズムという用語を用いる。「イスラーム・コスモポリタニズム」の概念は、アフガン・ディアスポラ知識人であるハシム・カマーリーの著作の分析から把握することが出来る。カマーリーの著作内容の推移をみると、1991年頃から2005年辺りまでは、イスラーム法、公正や正義といった内容に重点が置かれてきたが、2006年から2010年辺りでは、イスラーム法への言及も見られるが、人権やシティズンシップへの言及が多くなっている。2013年頃になると、平和やハラールそして中道思想といった視点が增加していることがわかる。これは、国際社会の変化の中からウンマが現代的な様態へと変化したと指摘できる。「イスラーム・コスモポリタニズム」の一つの例として、カマーリー自身も関わりを持つ、コモンワード・イニシアティブについて言及する。

#### (2) コモンワード・イニシアティブ

このコモンワード・イニシアティブとは、2007年に“A Common Word Between Us & You”「わたしたちとあなたの共通の言葉」という書簡がイスラーム宗教指導者たちによりだされたことに始まっている。ここでのわたしたちはイスラームの事を指しており、あなたはキリスト教の事を指している。2007年10月当初はイスラームの学者や宗教指導者などから138名の署名を得ている。現在では、460を超えるイスラーム学者や組織や団体の署名を得ており、キリスト教徒からは500以上の署名が期待できるとされている[MABDA 2012]。

このイニシアティブが打ち出された背景には、宗教間の対話の存在が大きいといえる。世界の人

口の半分以上を占めるムスリムとキリスト教徒の間での平和を達成しない限り、世界の平和はなり得ず、お互いの対話が成されない場合は世界自体の存続そのものが危ぶまれると記されている[MABDA 2012: 53]。イスラームとキリスト教との調和を目指しており、この書簡の応答としてユダヤ教も存在している。宗教間の対話の一環として、だされたイニシアティブのように感じるが、このイニシアティブが目指すのは、宗教間の平和ではなく、世界の平和であり、世界的な視点に立って提起されたイニシアティブであると考えられる。

## 参考文献

- 池端雪浦 1999 『東南アジア史Ⅱ』 山川出版社。
- 遠藤義雄 2002 「ターリバーン」『岩波イスラーム辞典』 岩波書店, p. 617.
- 河野哲也 2015 「コスモポリタニズムとその敵——政治と形而上学」『哲学論叢』42, pp. 1–13.
- カント, エマニュエル 1985 『永遠平和のために』(宇都宮芳明訳) 岩波文庫。
- 久保一之 2002 「カーブル」『岩波イスラーム辞典』 岩波書店, p. 283.
- 小杉泰 2006 『現代イスラーム世界論』 名古屋大学出版会。
- コーエン, ロビン 2012 『グローバル・ディアスポラ』(駒井洋訳) 明石書店。
- 鈴木均 2005 『ハンドブック現代アフガニスタン』 アジア経済研究所。
- 戴エイカ 2014 「越境をどうとらえるか: ディアスポラの視点」『Peace and culture』6(1), pp 139–148.
- 築島謙三 1965 「マレー人の民族意識」『東南アジア研究』3(2), pp.36–46.
- 中村正志 2006 「ビジョン 2020 の骨子と背景——新経済政策との共通」鳥居高(編)『マハティール 政権の 22 年——文献レビューと基礎資料』 アジア経済研究所, pp 31–49.
- ハーヴェイ, デヴィッド 2013 『コスモポリタニズム——自由と変革の地理学』(大屋定晴・森田成也・中村好孝・岩崎明子訳) 作品社。
- 長谷川啓之 2009 「マレーシア人種暴動」上原秀樹・長谷川啓之(編)『現代アジア事典』 文真堂, p. 1150.
- 前田耕作・山根聡 2002 『アフガニスタン史』 河出書房新社。
- 宮島喬 2016 『現代ヨーロッパと移民問題の原点』 明石書店。
- 羅京洙 2014 「「コリアン・ディアスポラ」に関する試論的考察——観点の「省察」と「模索」」『移民政策研究』(6), pp 58–73.
- 渡辺光一 2003 『アフガニスタン——戦乱の現代史』 岩波書店。
- Baraulina, Tatjana. et al.. 2007. “Egyptian, Afghan, and Serbian Diaspora Communities in Germany: How Do They Contribute to Their Country of Origin?,” *Hamburg Institute of International Economics Research Peaper*, Hamburg: Hamburg Institute of International Economics (HWWI)
- Barfield, Thomas. 2010. *Afghanistan: a Cultural and Political History*. New Jersey: Princeton University Press.
- Cohen, Robin. 2008. *Global Diaspora: An Introduction* (2ed.). London & New York: Routledge.
- Crews, Robert. 2015. *Afghan Modern: The History of a Global Nation*. London: Belknap Press of Harvard University Press.
- Gibbons, Jonathan. 2016. *World Drug Report*. Vienna: The United Nations Office on Drugs and Crime.
- Johnson, Victoria, Said Dileri and Naw Eh Ywa. 2012. *Financial Life in a New Setting Experiences of Afghan*

- and Burmese (Chin and Karen) Communities in Melbourne, Australia*. Melbourne: Brotherhood of St Laurence.
- Kamali, Mohammad Hashim. 1991. *Principles of Islamic Jurisprudence*. Kuala Lumpur: Ilmiah.
- . 2010. *Moderation and Balance in Islam: The Quranic Principle of Wasatiyyah*. Kuala Lumpur: IAIS.
- . 2011. *Citizenship and Accountability of Government: An Islamic Perspective*. Cambridge: The Islamic Text Society.
- . 2014. *Afghanistan's Constitution Ten Years On: What Are the Issues?* Kabul: Afghanistan Research and Evaluation Unit.
- . 2015. *The Middle Path of Moderation in Islam: The Qur'anic Principle of Wasatiyyah*. Oxford: Oxford University Press.
- MABDA. 2012. *A Common Word Between Us and You: 5-Year Anniversary Edition*, (English Monograph Series No. 20). Amman: The Royal Aal Al-Bayt Institute for Islamic Thought.
- Marchand, Katrin, Melissa Siegel, Katie Kuschminder and others. 2014. *Afghanistan Migration Profile*. Kabul: International Organization for Migration Afghanistan.
- Mosutti, Alessandro. 2006. *Afghanistan Transnational Networks: Looking Beyond Repatriation*. Kabul: Afghanistan Research and Evaluation Unit.
- Safran, William. 1991. "Diasporas in Modern Societies: Myths of Homeland and Return," *Diaspora* 1(1), pp. 83–99.
- Saqeb, Ghulam Nabi. 2000. "Some Reflections on Islamization of Education Since 1977 Makkah Conference: Accomplishments, Failures and Tasks Ahead," *Intellectual Discourse* 8(1), pp. 45–68.
- Schleifer, Abdallah and Aftab Ahmed. 2015. *The Muslim 500: The World's 500 Most Influential Muslims 2016*. Amman: The Royal Islamic Strategic Studies Centre., p. 117.
- UNSD (United Nations Department of Economic and Social Affairs Statistics Division). 2016. *World Statistics Pocketbook 2016 edition*. New York: United Nations Department of Economic and Social Affairs Statistics Division.
- Bernam. 2014 (Oct.25). "PM credits 'Wasatiyyah' approach for country's rise as modern, progressive Islamic nation," *Malay-mail Online*. <<http://www.themalaymailonline.com/malaysia/article/pm-credits-wasatiyyah-approach-for-countrys-rise-as-modern-progressive-islam>> (7月29日閲覧).
- Cheah, Bernard. 2015 (Aug.18). "Najib: M'sians Must Defend Definition of Human Rights," *The Sun Daily*. <<http://www.thesundaily.my/news/1523466>> (7月29日閲覧).
- Department of Statistics Malaysia Official Website. 2015. <<https://www.statistics.gov.my/index.php>> (7月29日閲覧).
- Fallows, James. 2010 (Sep. 28), "A 'Global Movement of Moderates': Speech of a Muslim Prime Minister," *The Atlantic*. <<http://www.theatlantic.com/international/archive/2010/09/a-global-movement-of-moderates-speech-of-a-muslim-prime-minister/63689/>> (7月29日閲覧).
- GMMF (Global Movement of Moderates Foundation). n.d. "Introduction on GMMF" <<http://www.gmmf.org/about-us/introduction-on-gmmf/>> (7月29日閲覧).
- Itar, Abdul Aziz. 2015 (Nov.24). "Amalkan kesederhanaan: Sultan Nazrin gesa umat Islam jauhi tindakan ekstrem atas nama agama," *Utusan Online*. <[http://www.utusan.com.my/berita/nasional/amalkan-](http://www.utusan.com.my/berita/nasional/amalkan-kesederhanaan-sultan-nazrin-gesa-umat-islam-jauhi-tindakan-ekstrem-atas-nama-agama)

kesederhanaan-1.161809> (7月29日閲覧).

Marifa Academy. [2014]. <[http://marifaacademy.com/en/explore/inner\\_speaker/2](http://marifaacademy.com/en/explore/inner_speaker/2)> (7月29日閲覧).

Tahir, Datuk Aziz Jamaludin Mohammad. 2012 (Apr. 21). "Institut Wasatiyyah Tolak Ektremisme," *IPG Kampus Pedidikan Islam*. <<http://www.ipislam.edu.my/index.php/artikel/read/1363/Institut-Wasatiyyah-tolak-ekstremisme>> (7月29日閲覧).

UNHCR. 2016. *Global Trends Forced Displacement in 2015*. <<http://www.unhcr.org/statistics/unhcrstats/576408cd7/unhcr-global-trends-2015.html>> (7月29日閲覧).